走れメロス

Melos in Siracusa

雷羽

Ground Top

近代小説シリーズ

走れ（はし）メロス

試し読み版

雷羽　著

Ground Top小説

「走れメロス」

楽曲始　「Ark」KELUN
楽曲終　「Raise Your Hands」i-dep

登場人物

メロス
セリヌンティウス
ディオニシオス王

目次

一　シラクサの王　4

個人販売元　6

一　シラクサの王

　メロスは激怒した。あの王を赦さぬと。政治などという言葉を口にしたのはいつだったか、この訳のわからない言葉を、初めて思い知らさせるまでもなく、メロスは暴君を野放しにしておけない。この年までよくこんな王を知らずに過ごして来たものだ。それも仕方が無い、メロスは羊飼いの家に生まれ、無垢にも羊とともに育って来た男だ。だからこそ、悪というものを見過ごすことが出来ない。
　シラクスの街はメロスの住む村から十二キロほど行ったところにある大きな町だ。周りには何も無い道をひたすら、山も野も川も越え、はるばるやって来たのには訳がある。
　メロスが単純な男だと言うことは、村人はみな知っている。だが、その単純さは時として無知を生み、メロス自身を脅かすことも知っている。メロスに親はいないし、妻がいるわけでもない。血縁があるのは妹だけで、その妹にもようやく結婚相手が出来た。いついつ挙式をするのか村中が待ちわびているところである。そこで、調度するためにこのシラクスまでやって来たということだ。
　ところが、街はしんと静まり返っていた。人気はまばらで、メロスの記憶している街とはだいぶ雰囲気が変わってしまっている。日も落ちかかり薄暗くなった街路には深く影が落ち始め、さすがのメロスでもその路地を歩くには勇気がいるほどだった。
　向こうから歩いてくる若者に声をかけてみる。俯いていたが、もうしばらくも笑っていないような、無表情を浮かべながら、メロスを見上げた。
「この街は夜こそ賑やかなはずだ、何かあったのか。」
　その質問にも、若者は表情を変えなかった。むしろ、首を横に振り、落胆を繰り返すばかりで何も語ろうとしない。メロスの横をすり抜けた若者はまるで力を失くし亡霊のようだ。
　この街に何が起こったのか、メロスが辺りを見回しながら歩いても、人はいっこうに通らず、窓も戸も閉まりきり、声一つしない。目の先の噴水に、老人が座っていた。何をするわけでもなく、最初は人形かと思うほどだったが、メロスは老人の横に腰掛けた。
「一つ、お伺いしてもよろしいかな。」
「・・・なんなりと。」
　メロスの言葉に二歩遅れるように、ゆっくりとした口調で口を開いた。
「この街は何故、こんなに寂しい。私が二年前に来たときにはもっと歌や踊りで溢れているような活気ある街だった。このように寂れている訳をきかせてくれ。」
「王、ですな。一年ほど前にディオニシオス王が就いてから、それからですわい。」
「王。王が何かしたというのか。」
「シクラスの王は誰にも心を緩してくださらぬ、して我ら市民にも心を疑いなする。少しでも王から目を背けて見なされ、たちまちに死罪となりますわい。」
　メロスの目が城を見上げた。高台にある立派な城は、もはや民を守るものではないのか、メロスの心に沸々とした怒りがわいて来た。
「城の者は次々と殺されましたな。この半年で六人、民ももはや数えきれぬほどに。」
　歯を力みながら、メロスは立ち上がった。

単純な男なのだ。良いものは良い、悪いものは悪い。悪ければ是正をしたくなる。
「その王が乱心しているならば放っては置けまい。」
「乱心ではございませぬ。人が信じられぬだけであられるとか。」
メロスは門前にいた。はるか高く聳え立つ、城の門。重く閉ざされた門。そしてメロスの両腕を抱え込む二人の門番。ずるずるとメロスは城内に引き込まれた。かしゃんと高い音を立てて落ちたのは、メロスの短剣。
「全く、我が城の前でうろついた上に、この小剣。何の企てだ。」
ディオニシオス王は静かに低い声で呟いた。声に乗ったわずかな怒りを、メロスは感じないのか。王は冷酷にふさわしい血色の悪い顔色、立派な鬚こそ蓄えてはいるが初老の王だ。
「貴様が暴君とやらか。これだけ街が痩せ、民が怯えているというのに、何故このような真似をしているのだ。だから俺が貴様から民を救う。」
メロスの言葉に城内に響くほど王は高々と笑った。
「お前がこの儂をか、この短剣ごときでこの儂を貫けると思うてか。」
王の手がメロスの顔を持ち上げる。青い目が、城窓から漏れた光で輝いた。
「人の心など手に取るようにわかる。民が如何に訴えようとも、儂にはその心内が手に取るようにわかるぞ。疑うことは当たり前のこと、人の愚かな欲なぞに振り回される王など要らぬわ。」
「それが民のための王か。それで平和のための王か。」
「儂も平和を求めておるぞ。民が信じないのは王を疑っておるからだろう。同じことだ。」
「平和をだと。人を殺しておいて何が平和だ。」
「黙れ。」
王は赤い声でメロスを睨みつけた。メロスの単純明快な反論に少し焦ってもいたのかもしれない。
「お前は人を信じるのか。あの偽りと欲の塊ともいえる者どもを。口ではいくらでも綺麗ごとは言えるが人の心など所詮は愚かなもの。そんな心はもう見え透いたものだ。お前のように正論だけを振りかざして火に飛び込むような真似をして、死ぬ前に泣いても儂は聞かぬ。」
「死を覚悟せず、どうして貴様の前に現れるというのか。」
王座から降りてメロスの首元から短剣で衣を引き割くと、その胸元を露にする。衛兵が肉体がよく見えるよう王に向けてメロスの体を反らせると、筋肉のついた体が美しく日に照らされた。
「この肉体を磔にすればさぞかし美しかろう。」
何も言わぬメロス。王はその胸元で実を付ける乳首を舌でべろりと舐め上げた。メロスの体が跳ね、乳首はみるみる膨らんでいく。そして王の湿った舌は厚い胸板を、下から上に舐め上げる。ついにはメロスから甘い声が挙がった。
「俺を殺すのならば、王に慈悲の心があるならば、３日間の猶予を貰いたい。せめて妹の結婚式に、参加させてくれまいか。結婚式を挙げさせ、我が妹に夫を持たせた暁には、またここへ戻ってこよう。」

個人販売元

Ground Top　http://groundtop.sakura.ne.jp/
雷　　羽　banji.jp@gmail.com

Printed in Tokyo, Japan.
All Right Reserved.

販売価格：非売品
SGT販売コード：df-784942wbvp_s
取扱種別：電子取引
販売者：LeiYu
販売元：Ground Top（http://groundtop.sakura.ne.jp/ ）
作成者：雷羽
作成元：Ground Top（http://groundtop.sakura.ne.jp/ ）
連絡先：banji.jp@gmail.com
著作権：Copyright (C) Ground Top by LeiYu.

ZIP内容
・hashiremelos_sample.pdf